

渤海の「二四塊石遺址」について

方 學 鳳
吳 滿

1. はじめに

渤海国は、紀元698年から926年までの229年間の存続期間中、輝かしい物質文化を創造した。渤海国が残した遺址と遺物は渤海研究において貴重な史料となっている。「二四塊石」はその中の1つである。

「二四塊石遺址」についての調査と研究は、今世紀50年代より始まり今日に至るまで続けられている。これまで「二四塊石遺址」の発見は、歴史学、考古学、方位学などの学界の強い影響と深い関心を受けつつ熱い研究雰囲気と呼び起こしてきた。

「二四塊石遺址」の存在が学界で初めて知られるようになったのは、敦化県境内の牡丹江沿岸にて発見された時期からである。1957年5月から8月にかけて、吉林省文物管理委員会、敦化県文化課など三団体の合同で牡丹江上流の渤海遺跡に関する全面的な調査が展開された。次いで、1960年に至り、再び以前の基礎調査を踏まえて再調査が実施された。こうして二度に亘る調査により、江東、官地、海房青、腰甸子などの四カ所の「二四塊石遺石」についての調査も重ねて遺跡調査が実施された。この四カ所の「二四塊石遺址」についての調査は、敦化県境内の牡丹江上流に位置した渤海時期の「二四塊

石遺址」についての最初の調査であると同時に最初の発見である。

1960年、王承禮先生は、二度に亘って調査した史料を総合的に分析して「吉林敦化牡丹江上游渤海遺址調査記」なる調査報告書を『考古』（第11号）に発表した。

1958年7月下旬と8月中旬には、吉林大学（元、東北人民大学）歴史学科の3学年の学生6名で組織された敦化文物調査隊は、單慶麟先生の指導のもと、敦化県地域内の渤海文化遺物と「二四塊石遺址」に対する二十日間の調査を実施し、かつ、その調査内容を概括して『吉林大学學報』（社会科学版、1958年、第3輯）に発表した。

1960年3月から4月の間に、孫秀仁などの黒竜江省考古研究所の学者が敦化市から上京城に至る牡丹江沿岸の黒竜江城境内の鏡泊湖沿岸段において「二四塊石遺址」二カ所を新たに発見した。しかしながら、その後、種々の原因により永い間、発表されえず、30年後の1991年になって初めて報告書が世に発表された。なお、1985年に出版された『敦化市文物志』に、江東、官地、海青房、腰甸子などの「二四塊石遺址」についての論文が掲載されている。

次いで1986年には、開山屯から図們市に至る豆満江区間沿岸にて発見された「石建坪二四塊石遺址」と「馬牌二四塊石遺址」についての論

文が『図們市文物志』に発表された。これはまた、その後、『吉林省志』『渤海史研究(2)』『渤海国』『北方文物』などの書籍と雑誌にも掲載された。

一方、朝鮮民主主義人民共和国社会科学院考古研究所にて編纂された『朝鮮考古学概要』と『渤海駅路』(李泰熙著)には咸鏡北道の東海沿岸で新たに発見された「二四塊石」に関する論考が併せて紹介された。

以上、渤海史料「二四塊石遺址」に関する発見と調査は、今世紀50年代から始まり、その分布範囲は黒竜江省寧安県の鏡泊湖付近の湾溝と慶豊などの二カ所、吉林省敦化市から寧安県渤海鎮に通じる交通路近辺に四カ所、開山屯から図們に至る豆満江沿岸の交通路近辺、即ち石建坪と馬牌に二カ所、朝鮮側の東海沿岸に位置する會文里、慶星、東興里、松坪溝の地域に四カ所が分布している。

以上、現在まで発見された「二四塊石遺址」は全部で十二カ所であるが、この外、延吉から依蘭、百草溝、汪清に至る交通路区間にも「二四塊石遺址」が存在した、という説が伝わっているが、未だ発見されていない。

渤海国史料の「二四塊石遺址」は、渤海史研究に珍奇にして貴重な史料となっている。そのため、今日まで渤海史研究者の注目を集めてきたが、未だに円満な結論が提出されている状況ではない。

2. 「江東二四塊石遺址」と「會文里二四塊石遺址」の現状

次に、二四塊石遺址の中で、「江東二四塊石遺址」と「會文里二四塊石遺址」の現状について論述しよう。

2-1 江東二四塊石遺址

「江東二四塊石遺址」は、敦化市内の東南方向にある高い丘陵の上に位置している。そして、北方には敖東城と河を挟み向かいあっている。また、その遺址の周囲は地勢が平坦で、開豁された地帯である。遺址の方位は南北に配列されており、南方に敦化から延吉と寧安に通じる交通路があり、東方には江東郷供銷社と道路を挟んで向かい合っている。また、西方には長図鐵路があり、北方に300m離れた処に牡丹江が南から北に向かって流れている。塊石は、その材料が全て玄武岩であり、三列に分かれて南北に配列されている。また、遺址の東西の長さは10.54m、南北の幅は10.15mで、8個の礎石が置かれている。中間列の長さは9.90mで、東方から4番目の礎石は存在しない。南方列の長さは10.53mで、8個の礎石が置かれている。列と列の間の距離は2.30mである。

礎石と礎石の間隔は一般的に0.5mだと言われているが、実際は各々多少の相違が見られる。南方から最初1列目は礎石間の距離を測定してみると、東方に置かれている最初の礎石と第2番目の礎石の間隔は30cm、第2礎石と第3礎石との距離は50cm、第3礎石と第4礎石との間隔は40cm、第4礎石と第5礎石との間隔は30cm、第5礎石と第6礎石との間隔は30cm、第6礎石と第7礎石との間隔は47cm、第7礎石と第8礎石との間隔は70cmである。

また、第1礎石の上部中心と第2礎石の上部中心との距離は1.20m、第2礎石の上部中心と第3礎石の上部中心との距離は1.40m、第3礎石の上部中心と第4礎石の上部中心との距離は1.30m、第4礎石の上部中心と第5礎石の上部中心との距離は1.20m、第5礎石の上部中心と第6礎石の上部中心との距離は1.30m、第6礎石の上部中心と第7礎石の上部中心との距離は

1.45m、第7礎石の上部中心と第8礎石の上部中心との距離は1.60mである（第8礎石が西方に傾いているために、他の礎石の間隔よりさらに広い）。

第1礎石の直径は80cm、第2礎石の直径は70cm、第3礎石の直径は60cm、第5礎石の直径は40cm、第7礎石の直径は80cm、第8礎石の直径は80cmである。礎石が最も高く地面に入っている部分を基準にして見ると、第1礎石の高さは80cm、第2礎石の高さは50cm、第3礎石の高さは40cm、第5礎石の高さは40cm、第7礎石の高さは60cm、第8礎石の高さは80cmである。

中間列の東西の端に置かれた礎石の上部部分は平坦に整えて削ってあるが、その具体的状況は次の通りである。

前列、即ち第1列の東方から2番目の石は、上部部分をよく整えて、中央に向かい南北方向に、長さ60cm、幅33cm、深さ2cmの状態に掘り削ってあるし、南北両端にはさらに深さ3cmの状態に掘り削ってある。

前列西方の1番目の石も上部部分を平坦に整え、中央に向かい南北方向に長さ60cm、幅40cm、深さ2cmの状態に掘り削ってあるし、南北の両端も深さ4cmの状態に掘り削られている。

中間列の東方の第1番目の礎石の上部部分も平らに整え、南北方向に長さ62cm、幅34cm、深さ1cmの状態に溝が掘られており、南北の両端もまた、深さ3～4cmの状態に掘られて段を成している。

中間列の西方の第1番目の礎石の上部部分も平らに整えられ、南北方向に長さ73cm、幅45cm、深さ2cmの状態に溝が掘られており、南北の両端もまた、深さ4cmの状態に掘られている。

後方列の東方の第1番目の礎石も、上部部分

を南北方向に、長さ73cm、幅40cm、深さ2cmの状態に溝が掘られており、南北の両端もまた、深さ3cmの状態に掘られている。

後方列の西方の第1番目の礎石も、上部部分を南北方向に、長さ70cm、幅40cm、深さ1cmの状態に溝が掘られており、南北の両端もまた、深さ3cmの状態に掘られて段を成している。このような状況は建物の基材が、左右前後、四面にわたり動けないようにするためである⁽¹⁾。

中間列の礎石の上部部分の直径は約0.8mで、比較的平坦に造られており、今もその加工した形跡が窺えるし、礎石の下部部分は土に埋もれており、地面に食い込んでいる部分の高さは0.8mである。また、礎石の地面下には0.5mの状態ですでに盛られた層をなし、その下に0.9mの2つの碎石と土を混合して積んだ層がある。

二四塊石は、3列に分かれ、1列に8個ずつ配列されているので、碎石基礎も3列に分かれていたに違いない。列と列の間隔は土層になっているだけで、碎石基礎がない。また遺址内には赤褐色と灰色の布模様の旗、繡瓦の破片、滴水瓦などが散在している⁽²⁾。

「二四塊石遺址」には、当然、24個の礎石がなければならない。しかし、1個がなくなり、現在、残存しているのは23個だけである。1個の礎石がいつ、どのように消失したのかはよく判らないが、清国の時代の文献によれば、百余年前、既に当地で、23個の礎石しかなかった、と伝えている。したがって百余前に既に消失していたことが分かる。また、礎石の上にはどのような建物があったのかについては、遺址の周辺に岩瓦、繡瓦、滴水瓦などが多く散在していることから判断して瓦屋根の建築物であったことが分かる。

(1)『渤海史研究(2)』(延辺大学出版社), 116～117頁参照

(2)『敦化市文物志』79頁参照

「江東二四塊石遺址」から西南方向に6km行くと、渤海国時代の墓地群である六頂山墓地群があり、またそこから西南の方向に4km行くと、「永勝遺址」がある。

2-2 會文里二四塊石遺址

朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）において、現在までに発見された二四塊石遺址は、全部で4カ所である。即ち、咸鏡北道内に存在する漁郎群會文里、金策市東興里、清津市松坪区、慶星群の4カ所である。この中、慶星群の二四塊石遺址は1945年以前に既に破壊され消失している⁽³⁾。

これら4カ所の遺址の発見は考古・歴史学界に大きな波紋をもたらし、重視されてきた。

ところで、去る1983年6月、朝鮮社会科学院考古研究所は、咸鏡北道漁郎群會文里において二四塊石遺址一カ所を発掘した。当地は會文里から西方約300m離れた畝地に位置しており、交通路から45m離れた処にある。また、その形態は高さ1m、南北の長さ19.2m、東西の幅13.5mの方形の基壇の上に、南北方向に、東西に3列に配列されており、列ごとに8個ずつ、合わせて24個の大型礎石である。

発掘調査結果によれば、礎石の下は3列に

礎石が配列された方向と同様、長方形の窪み（長さ10cm、幅と高さ1m）が掘られている。窪み内には、河卵石を70cmの厚みに揃えて基礎とし、その上に礎石を載せてある。礎石は全て玄武岩であり、長さ、幅、高さは各々70～90cm程の大型の石である。礎石の下部部分は約30cmに巨り地中に埋まっている。また、礎石が占める基壇の面積は、南北の長さ10m、東西の幅7.8m、列と列の間隔は3.9mである。礎石の配列から判断して、「會文里塊石遺址」は正面が7間、側面2間からなる建築物の礎石であろう、と思われる。

一方、遺址には、渤海国時代の布切れ模様の瓦、瓦破片、磁器破片、土器破片などが多く散在している。瓦の中には紅色と灰色の2種類があり、紅色瓦の厚みは1.5cm、灰色瓦の厚みは1.7cmである。

「會文里二四塊石遺址」の形態は、牡丹江流域と豆満江流域の二四塊石遺址と酷似している⁽⁴⁾。

次に、現存する12種の二四塊石遺址の形態状況を表に整理してみよう。

3. 現存する「二四塊石遺址」の形態状況

番号	遺址の名称	方 位	石 質 と 構 成	現存する礎石	東西の幅	南北の長さ
1	江東二四塊石遺址	南北方向に位置。六頂山渤海墓地群との距離は6km。交通路沿線に位置。	玄武岩。3列に配列。各列に8個の塊石。	23個	10.53m	7.85m
2	官地二四塊石遺址	東西方向に位置。牡丹江東方に位置。交通路沿線。	玄武岩。3列に配列。1列に8個石。	22個	9.05m	10.60m

(3)『延辺大学朝鮮学国際学術討論會論文集』（延辺大学出版社）292頁参照

(4)前掲書、同頁参照

渤海の「二四塊石遺址」について

番号	遺址の名称	方 位	石 質 と 構 成	現存する礎石	東西の幅	南北の長さ
3	海青房二四塊石遺址	交通路沿線。牡丹江 東方に位置し、南北 に向く。	玄武岩。3列に配列。 1列に8個石。	24個	10.38m	8.28m
4	腰甸子二四塊石遺址	南北方向。牡丹江西 方に位置。	玄武岩。3列に配列。 1列に8個石。	22個	9.50m	7.80m
5	慶豊二四塊石遺址	東西方向		5個		
6	清溝二四塊石遺址	東西方向	3列に配列。1列に 8個石。基壇の高さ 1m。基壇の南北両 端の長さは各々3m。 東西は各々5m。基 壇の南方部分に階段 がある。	24個	9.30m	7.80m
7	馬牌二四塊石遺址	東西方向。東方に豆 満江。	5角礎石。3列に配 列。列ごとに8個石。	9個	10余m	約7.5m
8	石建坪二四塊石遺址	東西方向。東方に 500m離れた処に豆 満江。	5角礎石	6個	約8m	付近の農民 によると約 20m。
9	慶星群二四塊石遺址					
10	會文里二四塊石遺址		3列に配列。角列に 8個石。正面2間。 側面2間。		7.80m	10.0m
11	東興里二四塊石遺址					
12	松坪溝二四塊石遺址					

番号	列間の距離	石間の距離	礎石の高さ	礎石の直径	出土遺物	周辺遺址
1	2.3m	0.3~0.5m	地面に食い込んだ 部分0.8m。	0.8m	布切れ模様瓦と 繡瓦。	敖東城と牡丹江 を挟む。
2	2.7m~3.0m	0.3~0.8m	0.15~0.50m	0.75m	布きれ模様瓦破 片。土器破片。	西南2.5km離れ た処に石虎の古 城がある。
3	2.8m~3.0m	0.3~0.8m	露出部分の長さ 40cm。	0.75m	布切れ模様瓦。 岩瓦破片。繡瓦 破片。水滴瓦破 片。木炭粉と焼 き土。	

番号	列間の距離	石間の距離	礎石の高さ	礎石の直径	出土遺物	周辺遺址
4	2.6m	0.5～0.8m	0.3～0.5m	最小0.35m。 大体0.6～0.7m。	岩瓦破片。繡瓦破片。水滴瓦破片。	東方に0.5km離れた処に建築物遺址。北方山城に城塞。
5					灰色布切れ模様瓦。	西方に5里離れた処にナムホツ古城がある。
6	7.8m		0.5m	1m	布切れ模様瓦。焼き土と滴水瓦がある。	南方に約10里離れた処に湾溝古城跡がある。
7	動いた形跡があり不明確。	動いた形跡があり不明確。	0.9m	0.65m		
8			0.85m	0.6m	布切れ模様岩瓦破片。	
9						
10	3.9m		0.7～0.9m	0.7～0.9m	瓦破片。磁器破片。土器破片。	漁郎群内にチバンリ山城と漁郎チョンガンアン保堡がある。
11						
12						

4. 二四塊石遺址に関する学界の見解

今日まで、史学界において「二四塊石遺址」を解釈した状況を帰納すれば、およそ7種の動かしがたい観点がある。

第1の解釈は、寺廟あるいは宮殿、官衛（官庁）の跡だという説である⁽⁵⁾。しかし、「二四塊石遺址」は寺廟、宮殿、官庁になりうる範囲と規模を具備していない。規模としてはあまりにも小さいからである。もし宮殿や官庁であったならば必ず城壁や壁塼、それに付属建物がな

ければならないはずなのに、「二四塊石遺址」にはそのような遺跡が見られない。また、宮殿や官庁跡であったならば、そこには琉璃瓦などがなければならないがそのような遺物はこれまで発見されていない。渤海領域内には寺院遺跡が多くみられるが、「二四塊石遺址」のように三列に配列され、各列ごとに8個ずつあるのは他には存在しない。現在までに発見された「二四塊石遺址」は、12カ所にもなる。もし宮殿であったならば、渤海社会に、何故にそんなに多くの場所に宮殿があったのか疑問である。したがって寺廟、宮殿、官庁跡だったと主張する説

(5)『敦化県二十四石遺跡調査記』（吉林大学人文科学学報）、『渤海史論著編』（吉林大学人文科学学報）789

頁参照

は満足な根拠とはなりえない。

第2番目の解釈は、渤海王族の遺体を上京から旧国に運び、埋葬する際、暫く靈柩を安置した処だという説である⁽⁶⁾。これは、「二四塊石遺址」が牡丹江流域においてのみ発見された当時の仮説であった。しかし、その後、開山屯から図們に至る豆満江西岸に位置している馬牌と石建坪においても「二四塊石遺址」が発見されたことと、朝鮮の會文里、東興里、松坪溝にても同じ時期の「二四塊石遺址」が発見されたことにより、この仮説は説得力がなくなった。実際のところ、渤海国王と王室貴族が死亡すれば、全て六頂山墓地に埋葬したわけではない。上京龍泉府から北へ8里離れた処にある「三爻坟」は渤海王の墓地である。これは未だにどの時期の渤海王の墓地であったかは定かでないが、渤海王の墓地であることは確認されている。この王の死体は六頂山墓地に埋葬しないで「三爻村」に安葬されている。中京顕徳府管轄範囲内にあった龍海村の龍頭山にある貞孝公主は文王の第四女であるから正真正銘の王族貴族の一員である。

貞孝公主墓地並書に「培養於染谷之西原」と記されていることから、貞孝公主墓の近くに貞孝公主より一段階位階が高く、王よりは一段階位階の低い誰かが埋葬されたはずである。貞孝公主とその近辺に埋葬された王室貴族は、死亡後、敦化市六頂山に運び埋葬したのではなく、中京から東南方向に約20里離れた龍頭山渤海王室貴族墓地に安葬された。このような史実から判断して、第2番目の解釈は信じるに十分な根拠とはならない。

第3番目の解釈は、渤海王室の記念建物であった、という説⁽⁷⁾であるが、これも世人を説得させうる根拠とはならない。

第4番目の解釈は、穀物倉庫だった、という説である。穀物倉庫だったと解釈する研究者の主要な根拠は、『吉林地志』『鷄林旧聞録』に、敦化市郊にある江東二四塊石遺址は当年（渤海時期を指す）の倉庫遺址であるようだ、と記載してあることと、『吉林地理紀要』に、江東二四塊跡遺址は当年の倉庫遺址であるようだ、とした記録である。『鷄林旧聞録』『吉林地理紀要』は、民国2年（1913年）に魏声蘇によって著された書物である。この著書は、当代の文献でない上に、著者自身も倉庫であるらしいと疑問を抱いて確認できなかったものである。もし穀物倉庫であったとするなら、いかなる理由で河川を挟んだ重要な交通路沿線に設定したのか？またいかなる理由で、首都の京や府の所在地や城内に設置しないで遠く離れた交通沿線に設置したのか、疑問である。

「江東二四塊石遺址」は敖東城から1km離れた処にあるし、「官地二四塊石遺址」は官地古城から5里離れた処に位置しており、「海青房二四塊石遺址」付近には城跡がない。「腰甸子二四塊石遺址」付近にも城跡がない。ただ二四塊石遺址から西北方向に2里程離れた山頂に軍事要塞があるだけである。官府の糧食倉庫を城外に設置するのは不合理である。また、規模がなぜ、そんなに小さいのか？なぜ建築規模をそんなに厳格に計画し統一したのか？このような疑問を解くこときない。したがって穀物倉庫説も根拠が不十分である。

第5番目の解釈は、祭祀を執り行う際に使用した建築跡だった、という説である⁽⁸⁾。

第6番目の解釈は、二四塊石は、礎石ではなく人々が崇拝する神秘的な石であるとするものである。

(6)『延辺文物簡編』94頁参照

(7)前掲書、87頁参照

(8)前掲書、同頁参照

(9)『渤海史研究』（延辺大学出版社）119頁参照

第7番目の解釈は、孫オンリョン・李チョンボク共著の『渤海国』にて提起された「これは可能性として、渤海の主要な交通路沿線に造られた亭閣式建築で、行商人たちの休息と便利を図るための駅（宿駅）と似たものであろう」とする駅説である。最近、月清群馬牌と石建坪⁽¹⁰⁾、そして咸鏡北道の慶星、東興里、松坪区、會文里でも二四塊石の建物跡が発見されたが、その様態と形跡、大きさ、材料などが全て河辺りの道端に位置していることから推して主要な交通路に建築された駅だ、と解釈するわけである。

以上7種の見解の中で、第7番目の見解が比較的説得力がある、と思われる。

5. 二四塊石遺址に関する基本的考察

5-1. 「二四塊石遺址」は渤海国時代にのみ存在した特殊な遺址である。

高句麗は、約七百年間、存続しながら悠久な文化と輝かしい歴史を創造したが、その広大な往時の領土内から渤海の「二四塊石遺址」のような遺跡地を未だに発見できないでいる。また、遼国や金国の往時の首都一帯や彼の地の地域内からも依然として「二四塊石遺址」のような遺跡地が発見されたことがない。ただ、「馬牌二四塊石遺址」からのみ渤海時期の遺物とともに、遼・金時代の遺物、即ち滴水瓦、樺頭瓦、獸面瓦などが出土しているのみである。この事実は、渤海時期に建築され使用されたものが渤海の滅亡後、遼国と全国にそのまま使用されたことを意味する。一方、清国の時代の多くの遺跡の中にも二四塊石遺址らしきものは見られない。

二四塊石遺址は、渤海の上京龍泉府から旧国

の救東城に至る牡丹江流域と開山屯から図們までの道程間の豆満江西岸、汪清県百草溝鎮から汪清鎮に至る嘎呀河流域の西崴子、朝鮮の東海岸一帯に属する慶星、會文里、東興里、松坪区などの地域で発見されている。現在までに発見された状況によれば、上京龍泉府から旧国救東城に至る牡丹江流域に集中しているが、その数は合計して六カ所である。以上の事実から考察すると、二四塊石遺址は専ら渤海時期にのみ存在した建築物跡であり、渤海人が残した特殊な遺跡だと言えよう。

5-2. 「二四塊石遺址」は確かな建築遺址であり、二四塊石は建物を造営した時の礎石である。「江東二四塊石遺址」の礎石の下部部分は土中に埋もれており、また地面以下に0.5m前後、土を固めて積んであり、その下に厚さ0.9m程の碎石と土を混ぜて積んだ層がある。「腰甸子二四塊石遺址」の礎石は、地面下、約20~25cmは土からなる層であり、その下、25~80cm⁽¹²⁾は土と石を混合して造った層になっている。

ある礎石の下部は軟らかい砂と小石で整然と固めて造られた基礎をなしている。またある礎石には、窪みを削って掘ったものがある。例えば、「江東二四塊石遺址」の中間列両端にある礎石には、全て深さ3.5cm、幅40cmの窪みが掘られている。これは建物の基材が左右に動くのを防止するためであろう、と考えられる。現在、上京龍泉府跡に残存する宮殿跡の礎石にも、その上に建てる宮殿の形態、規模、組み立てに合うように種々の形態に掘り削ったものが保存されている。

一方、遺址では木炭と紅焼土が出土するが、

(10) 『図們市文物志』43~44頁参照

(11) 『延辺文物簡編』94頁参照

(12) 『敦化市文物志』83頁参照

木炭の発見は礎石の上に木造建物があったことを証明してくれる。そしてまた、岩瓦、獣瓦、滴水瓦の破片などが出土するが、これらは基礎の上に建てられた建築物の屋根に瓦を載せたことを証明してくれる。

以上の事実から判断して「二四塊石遺址」は建築遺址であったことが確認できよう。

「二四塊石遺址」が建築遺址だと確認されれば、それはどのような建築跡なのであろうか？「二四塊石遺址」はその、いかなる寺院や宮殿、官府のような建物でないことについては既述したので再述しない。ならば一般舎宅ではなかったか？という疑問も成り立つ。しかし詳細に考察すれば、一般舎宅ではない、ある特殊な建物であることを推測させる。なぜならば、第1に、当時の社会経済と歴史的な条件を考慮すると、当時の民、百姓が統治者の苛酷な搾取と圧迫を受け、生活が困難な状況にありながら大きな礎石を敷き、瓦葺きの家を造って暮らすことができたであろうか？当時の一般人には到底できなかったはずである。したがってこの建物は一般の民が居住した舎宅であったはずがない。第2に、『新唐書・東夷傳』に依れば、「居依山谷、以草茨屋、惟王宮、官府、佛盧以瓦」（人々は山谷に依居して暮らしながら草で屋根を葺いた。しかし、王宮と官府、寺院だけは屋根を瓦で葺いた）と記録している。この記録から判断して、高句麗時代の王宮、官府、寺院は屋根を瓦で葺いたし、一般の民・百姓の家は草で屋根を葺いた草屋で暮らしたことが判る。したがって、渤海時代においても同様であったと考えられる。第3に、もし一般の舎宅であったとすれば、そんなにも、厳格にして造る必要性がなかったはずである。「二四塊石遺址」は1列に8個ずつ3列に、合計24個石に計画された建築跡である。したがって、これは統一的に計画された規模の

住居跡であり、一般の民・百姓の舎宅ではない。第4番目に、「二四塊石遺址」は、上京城から敦化に通じる牡丹江沿岸と東京龍原府から上京龍泉府に通じる豆満江旧間右岸、中原顯徳府から上京龍泉府に通じる旧間、南京南海府の所在地北清から東京龍泉府に通じる咸鏡北道東海岸など主要な交通路沿線にあり、他の地域では現在まで発見されたことがない。

以上の4つの事実から判断して、「二四塊石遺址」は渤海国時代の一般舎宅ではなく、特殊な建築物であったことが分かる。

5-3. 「二四塊石遺址」は駅跡である。

これに対する主要な根拠は次の通りである。

第1に、現在までに発見された12カ所の「二四塊石遺址」は全て渤海国境内の主要な交通路沿線に位置している。『新唐書・渤海傳』に依れば、「龍原東南渤海日本道也、南海新羅道也、鴨緑朝貢道也、長岭营州道也、扶余契丹道也…」(龍原の東南は海に臨むが日本に往く日本道であり、鴨緑は朝貢道であり、長岭は营州道であり、扶余は契丹道である)と記録されている。これらは、渤海国が対外国に通じる主要な交通要路である。これと同様、渤海国内にも主要な交通路があった。その中、首都から五京所在地に通じる道路は国内の各交通路の中でも最も重要な交通路であった。即ち、上京城(上京龍泉府を指す)から旧国(現在の吉林省敦化市)に通じる道路、東京龍泉府から上京龍泉府に通じる道路、中原顯徳府から上京龍泉府に通じる道路、南京南海府から東京へ通じる道路などである。

「二四塊石遺址」は正に渤海国の主要な交通路沿線にて発見された。例えば、旧国から上京龍泉府に至る牡丹江沿岸に「江東二四塊石遺址」、海青房二四塊石遺址、「腰甸子二四塊石遺址」、

「慶豊二四塊石遺址」、「湾溝二四塊石遺址」など、六カ所の遺址が発見されている。開山屯から図們市に至る豆満江右岸区間にて2カ所が発見されたし中京顯徳府から上京龍泉府に通じる区間でも1カ所が発見されたという。また、朝鮮民主主義人民共和国の咸鏡南道東海岸にて4カ所が発見されている。既に確認されたものと、発見されたというが未だ完全に確認されていないものまで含めると13カ所になる。このように、「二四塊石遺址」は、渤海国国内の主要な交通路沿線に分布している状況から判断して、駅（宿駅）であったことが分かる。

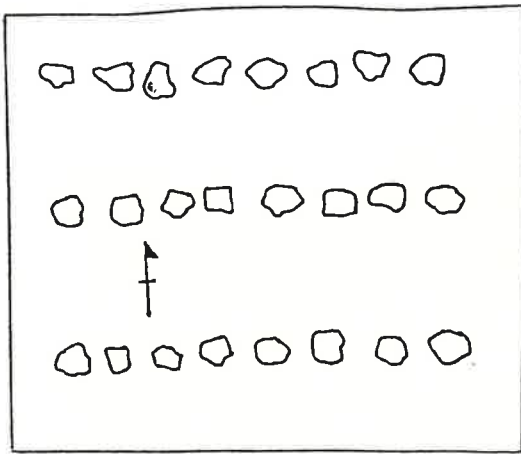
第2番目に、現在までに発見された「二四塊石遺址」は形態、構成、規模、材料など種々の点において基本的に同様であるという点である。「二四塊石遺址」の礎石は3列に配列されており、中間列に8個ずつ合わせて24個石が置かれている。列と列との間の距離が3mである。礎石は殆ど玄武岩を採用しており、遺址はその付近でのやや高い地帯を選定し、築いた基壇の上に礎石を設置している点などはどれも完全に一致している。また、礎石の体積と形態も基本的に同じであり、礎石と礎石との間隔、列と列との間隔、礎石の高さ、礎石上面の直径と上面を平坦に削ってあること、出土した遺物、遺址の総面積などは遺址ごとに若干の相違があるものの基本的にはおよそ同じである。このような事実は渤海領域内の各地に建築された「二四塊石遺址」は、統一された形態、規格、材料、規模と要求に従い築造されたことを知ることができる。敦化市の「江東二四塊石遺址」に置かれている礎石の平均直径は70cmであり、平均の高さ50cmである。ゆえに、このような礎石の上に建てられた柱と建物は一般的な住宅建物ではない、ある特殊な建築物であったと推察できる。したがって、「二四塊石遺址」は各地で任意に築造

し、管理したのではなく、統一された規格と要求に築造され統制、管理されたことを証明してくれる。

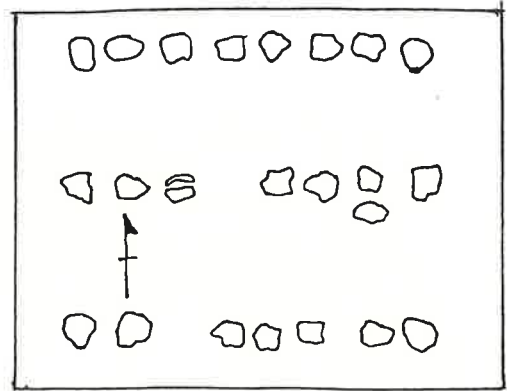
渤海国国内の主要な交通路沿線に設置された駅は、既述のような規格と要求に符号するものと推察する。したがって、「二四塊石遺址」は渤海国時期における国内の主要な交通路線に設置された建築遺址だと考えられる。

「江東二四塊石遺址」の礎石の平均直径と平均な高さから判断して礎石の上に建てられて柱は丈夫で高かったものと思われる。実際、どれ程高かったであろうか、これは礎石の上部面、即ち柱の高さは、礎石表面の直径、礎石の厚み、礎石の上に横たわっている横干木の幅によって柱の堅さ程度を推測できる。中間列の東西の両端に置かれている礎石の上部部分はすべて平坦に整えられ、中央に、南北方向に長さ60～73cm、幅33～40cm、高さ2～3cmに掘り削ってあり、南北両端にはまた、深さ3～4cmの窪みを施してある。このような事実は、この礎石の上に建てられた柱の大きさは横干木の幅33～40cm程度の直径の柱か、あるいはそれよりさらに大きな柱であったか、を考えさせる。もし33cmを直径としたならば、柱の周囲の長さは103cmであったはずであり、40cmを直径とした場合には、柱の周囲の長さは125cmであったはずである。因に周囲の長さが103cmと125cmの柱を想定すれば比較的大きく丈夫な柱であることが推測できる。

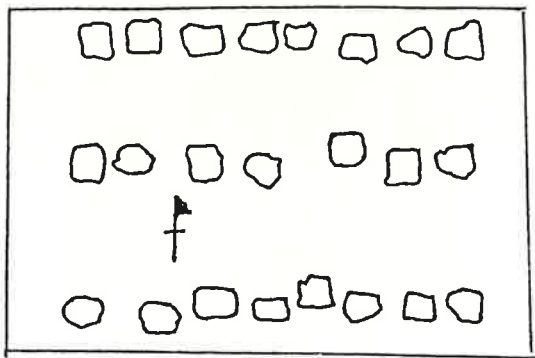
他方、遺跡には布切れ模様瓦、獣瓦、滴水瓦などが多く並べられ、陶器と火で焼かれた土が出土している。煉瓦は出土していない。したがって、この建築物は木材柱に土壁を塗り、瓦を被せた比較的勇壮な趣の建築物であったと思われる。なおこの建築物は1列に8個の礎石が配列され3列に置かれた建築跡なので正面が7間、側面が2間の住居跡である。



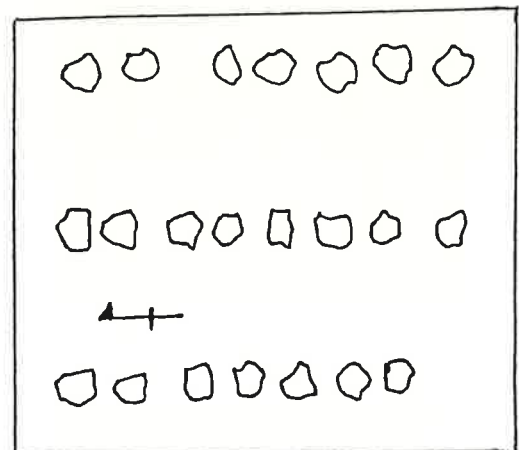
「海青房二四塊石遺址」平面図



「腰甸子二四塊石遺址」平面図



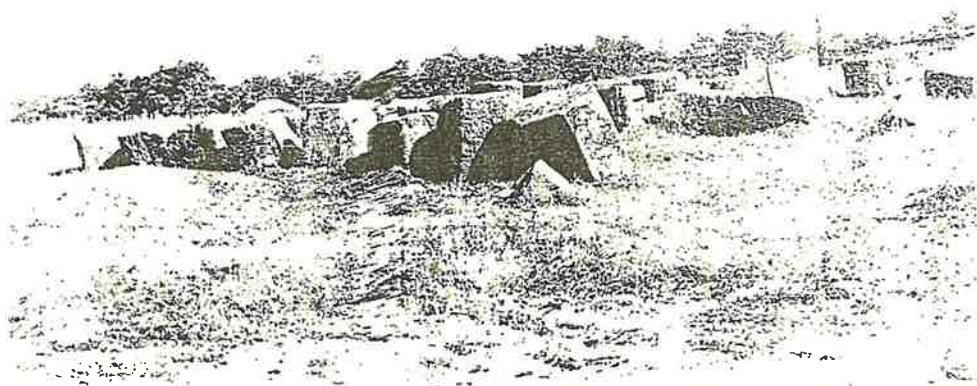
「江東二四塊石遺址」平面図



「官地二四塊石遺址」平面図



敦化市「腰甸子二四塊石遺址」から出土した滴水瓦



朝鮮「會文里二四塊石遺址」全景



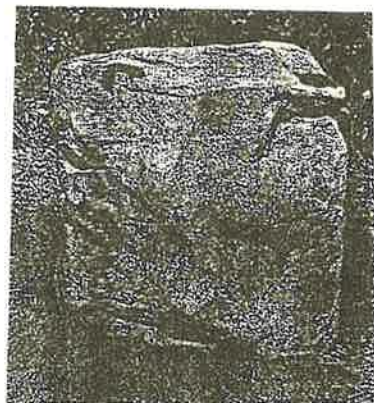
「江東二四塊石遺址」正面



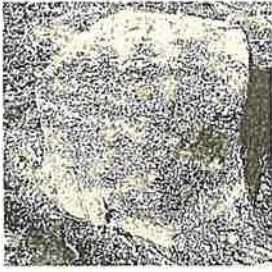
「江東二四塊石遺址」側面



「江東二四塊石遺址」正面



「江東二四塊石遺址」側面



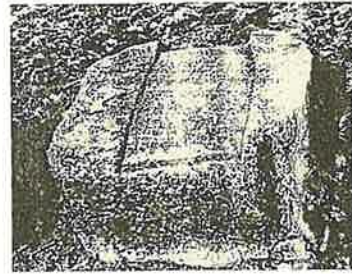
江東二四塊石の礎石



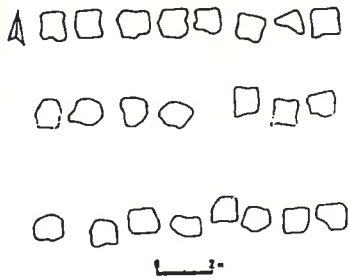
江東二四塊石の礎石



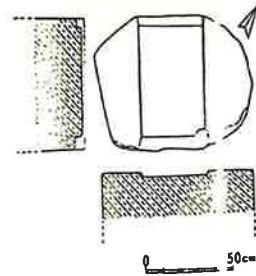
江東二四塊石の礎石



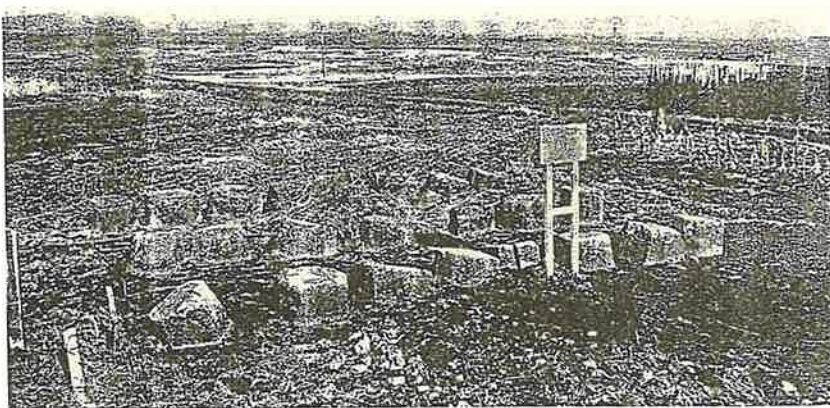
江東二四塊石の礎石



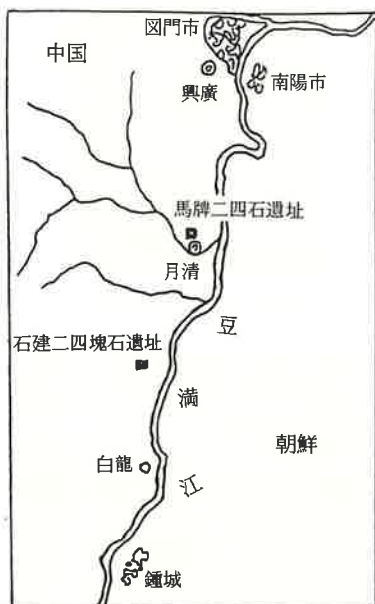
「江東二四塊石」平面図



「江東二四塊石」の側面図



敦化市の「江東二四塊石遺址」全景



豆満江沿岸の「二四塊石遺址」



朝鮮の咸鏡北道に散在する「二四塊石遺址」



敦化市境内の「二四塊石遺址」

6. あとがき

本稿は、著者の中の一人、方學鳳教授によってハンゲルで脱稿（1995年12月）された論文を執筆者（呉）が推敲と検討を重ね、さらに日本語訳出に努め本誌に掲載されたものである。呉は、方教授が本学のアジア研究所の客員研究員でもあり筆者（呉）に共同研究として発表されたい旨の依頼があり、これを快く承諾した。

方教授は、中国・延辺大学付設の「渤海史研究所」の所長職にありながら同大学の歴史学科の教授である。また、渤海史研究者として第一人者の立場にあり、これまで数多くの研究成果を著しつつ旺盛な研究活動を築いてこられた。

方教授はまた、1995年9月30日と10月1日の両日に亘って開催（新潟大学人文学部主催・同大学院現代社会文化研究科・同大環日本海研究会共催）された『日中国際シンポジウム』の「渤海と環日本海交流」に招待され、「渤海国墳墓上部の建築物試論」を発表された。因に、このシンポジウムにおけるテーマは、①渤海研究の最前線②渤海の国際的地位③環日本海の文化交流、であった。

渤海国は、紀元689年から926年にかけて約230年間、北は現在のロシア沿海州および中国の黒龍江省と吉林省、南は北朝鮮の北部に亘る広大な地域に存続した文化国家であった。しかも日本にとって重要なことは、奈良時代から平安時代にかけての200年間に日本に派遣された渤海使は実に30回を超えたこと、また日本から送渤海使の回数も15回を越えているが、現行の世界史や日本史の教科書に渤海国の名は出現するものの、既述はせいぜい数行であるに過ぎないことである。

では、それほどの国、渤海国がなぜ忘れられ

たのか。それは渤海国の歴史や文化に関する記録が消失して殆ど伝えられていないからであろう。渤海国の滅亡についても依然として謎に包まれたままである。確かに戦前の日本では、日野開三郎氏などの東洋史研究者に代表される渤海国についての研究がなされはしたが、それは日本の大陸侵攻と植民地政策の一環としての傾向が濃厚であった。そんな事情もあって戦後は永らく研究が不振であった。ところが、1990年代に入り、日・中・韓と北朝鮮にて渤海国についての研究が活発になされ、これまで日本でも6冊の専門書が発刊されるまでになった。

渤海史研究が近年、脚光を浴び始めた背景には、ロシア・中国・北朝鮮・韓国が渤海国の旧領土地域に対して経済的・歴史的観点から再照明を注いだことによる。

一方、大阪経済法科大学にても、1991年に「東アジアの社会と経済」のテーマの下、国際学術シンポジウムを開催し、第3部会〔歴史〕で、“東アジアにおける考古学、歴史学の現状、渤海史研究”を開き、内外の研究者による貴重な研究成果が発表された。

ところで、著者（呉）は2度に亘る中国・延辺朝鮮族自治州への訪問を経て、3度目（1994年夏の1カ月間）には、方學鳳教授等の案内により渤海国の遺跡を踏査する機会に浴した（これに関する紀行文については『KOREA TODAY』（1995年1月号・2月号参照）。

21世紀を目前にして、本格的な環日本海交流時代が到来しようとしている。現実的な課題としては、渤海船基地であった図們江周辺の開発が北朝鮮を中心にして関係国の熱い視線を浴びている。渤海国に関する研究は、従来、歴史・考古学に偏りがちであったが、将来は文学・言語・思想・芸能・地理・地質・気候・環境等の分野でも接近しうる有意義な分野である。

本稿はかかる意味において歴史・考古学の分野で未解決の問題を、諸学説を整理、分析した論考として示唆に富んでいる。戦後50年の節目が過ぎて、東アジア史研究の新たな姿勢が問わ

れている昨今、見ようとしなかったものを見ようとする新しい歴史観によって渤海史研究が見直されていくことを期待したい。